戦争中　昭和二〇年のことを

星野　千代子
中野二丁目

昭和二〇年一月七日「シゲキジコデシス」と電報が来た。年賀に、男の子を「英二」と命名したと嬉しいハガキが着いたばかりだったので、どんな事だったのか不明で皆で悲しんでいたが、とにかく博多に行かなくてはと思い、汽車のキップが買えない時だったが、電報を持って中野駅長さんに「何とか切符を売って下さい」とたのみに行ったら、「それなら私の親類になって下さい」と言われ、やっと入手したので、少ないお米で焼きオムスビを作り、急ぎ行った。

家は、母と私と二歳の和子と写真屋を開いていたが、その頃はもう材料もクスリも売る品物がなく、配給の少しの品を売り、暗室の仕事も少なくなった。お客様の写真を時々作るだけの、食料も配給の少ない品を時々買うだけだったが、東横線の農家の出征兵士のおられる家の写真を撮って、知り合いになって、着物や物を持って行き、野菜や芋などと替えて、お腹のペコペコするのを何とかゴマカシていた。

星野は博多に行けば、知り合いの農家が有るので何とか食べる事が出来た。重起さんは主人の五番目の弟で、とても気持ちのやさしい愛らしい人だった。軍属でトラックの係だったようで、一月七日、友人の代りに上乗りした事もないのに上乗りして、大道の曲り角のところで落ちたところに対向車に運悪くハネられ、体は何ともないのに頭部を「ダメ」にされ、頭部はホウタイでグルグル巻きにされ、星野のフデお母様は、子供達四人、何ともなぐさめ様がなかったと話していた。今、その母と子はどこにいるやら不明で、私達もやっと生きていた時でしたから、食事が少ないので、いつもおなかペコペコで、近くの映画館で映画を見ている間はペコペコを忘れてよく見にいった。

いつも朝、偵察の米機が来、夜は空襲で、その頃はほとんどの男の人達は徴用に取られ、星野は若い時足をケガして不自由だったので、家にいて近所の五〇戸ほどの組長をしていた。タクアンや野菜、芋などを人数に分けるのがとても大変だった。

三月十日は空襲の早朝、新聞が外で読めるぐらい明るく、下町が焼け、毎日空襲で夜もおちおち眠れなかった。和子は小さ

いなりに恐ろしかったのか、サイレンを耳ざとく「クウチウケイホウ」と、私達がグッスリ寝込んでいるのに教えてくれた。

十一日昼頃、木場の小山さん一家四人、近所に来られた。命からがら逃げるのが精一杯で体だけといわれていた。そして、やはり防空壕を作りなさいと教えられ、丁度向こう側は強制疎開で、家の二階の角の柱に大きなロープを結びつけ「懲役人」が十五人ぐらいで掛声しながら、「エンヤ、エンヤ」と家を取り壊していたので、四月になるとガスも出なくなったので、前の家の壊された木をいただき、石油カンを切り抜き、カマドにして煮炊きした。

人々は毎日リヤカーでタタミや戸や木柱など取りに来ていた。水は私のところは低いところで、上の方の人が水くださいと来ておられた。近所に井戸も有ったので、私は水にだけは困ったことがなかったのは本当に幸せと思っている。小山さんの主人は気落ちと、ご病気だったのか、半月ぐらいして亡くなられた。お里が四国だったので、私共が組長をしていたので何かとお手伝いした。今でも木場で材木屋さんをしておられ、お盛んのようだ。

前から学童疎開が有ったが、三月頃から田舎の近い、また有る人達はゾクゾク疎開していった。私達は博多なので家が無くなったら博多に帰ろうと話していたので、中野で毎日ガンバッて、空襲の合間は千葉や横浜近在、村山貯水地の近くの農家などに、子供さんが居たら「オモチャ」、それも和子にいつもデパートで良いものを買っていたので、食べる物を取り替えて飢えをしのいでいた。木のかわいいコックリ、コックリするゾウさんも和子に見つからぬ様に持ち出し、何でも食べ物に取り替えた。今駅前の風月堂の辺の食堂で、雑炊をいつも五〇人位の人が出来るのを待っていたのに、私の母はイヤがっていたが、私はやっぱり時々並んで買っていた。何かの骨など入ってゴハンツブは大さじ一杯やっとぐらいの水の様なものだった。

毎夜ズキンとモンペでサッと起きられるように寝ていたが、五月二六日は十一時頃から空襲が始まり、廻りみな火になった。サーと雨の様な音の照明弾がユラユラと明るく落ちて来て、雨のように落ちた。爆弾がポンポン、ポンポン、ポンポンとひっきりなく破裂し、廻りじゅう火になった。今の中野保健所の近くは、鍋屋横町の方から火が被るように近づき、電信柱が大波の様な火を被ると、何秒のうちにボーッと火柱になって燃え上がり、今の宮園自動車のところから新宿に向け、みな焼け野原になった。そのあとは新宿の駅が丸見えだった。夜通し、大久保通りは新宿の方から避難して来る人で一杯だった。

みな喉を乾かし、「防火用水」の水にタオルを入れ、それをチュッチュッと飲んでおられたので、バケツに水を入れ、星野と二人でヒシャクでサアサアと水をあげた。又、荷物を店の土間に置かして下さいと言われ、名前も何も知らないまま預かり、

火がおさまり、一か月後次々と取りに来られ、又水のお礼をしばらくは言われた。その時は子供の手を引き、小さい子供さんをおぶり、皆荷物を持ったり担いだり、明方、次の日一日中大変な人だった。

近所の人もオロオロしてどうしようと言われたが、焼けたらここを出ましょうと話していた。十センチ位の火のカタマリがゴロゴロ来、又隣は女世帯だったが、逃げるのが精一杯だったのか、二階の窓を開けたままだったので、これは大変、火が入ったら火事だと閉めに上がったりした。夜が明け、火も静まりホッとしていたら、星野の友人相原さんが夫婦で来られ、しばらく置いてくれと頼まれ、何も食べ物も無い時、何とかあちこち買出しに行って空腹をしのいだ。

その頃博多でも空襲で、母のイトコ一家五人が新道の賑やかなところで菓子屋をしていたのが、銀行の地下室で大勢の人達と、電気シャッターの地下室ドアに閉じ込められ亡くなった。私も世話になった叔父さんだったが、お墓がどこか分からず、お参り出来ないままで気になっている。

七月のある日、小山さんと成増に買出しに行くことにしたが、電車が少し進んでは止まり、また止まりで二時間位でやっと着いた。サテと見廻し二人で畑の有る所で、トマトやキュウリを買おうとしたが、空襲警報が出、艦載機が来たので、トマト畑にドーンと手からつき入ったが、直ぐ後を十メートル位だったか機関銃のバリバリという音がして、生きた心地がしなかった。農家の人に「トマト盗むんじゃないぞー」とどなられたから、私もあんまり悔しくて、負けずに「取るぐらいなら買出しになんか来ないよおー」と、生まれて初めて人に大声で言い返した。撃たれて死ぬかもと思っていたのにアンマリと思った。中野でも早稲田通りで何人か亡くなられたと聞いた。キュウリやトマトなど他の農家で売ってもらい、和子はよろこんで食べていた。

その頃、大学生の予科連の人達の集まりのために、四畳半の部屋を十日に一度ぐらい貸していた。もちろん無料で。時々何か食べ物を少し下さり、中に栗まんじゅう一個宝物のように有ったので、和子にやると、甘いからと口から吐き出していた。甘いものを食べた事がないので、母も私もビックリしてしまった。

毎日食べる事ばかり考えて、防空壕の上にカボチャを植えていたら、一つだけ大きいのがつき毎日楽しみにしていた。又アカザという草や川辺の草もお汁に入れて食べたが、甘いものは無くても我慢出来たが、塩のないのが一番つらかった。

味がない事は一番つらい事だった。インドが昔イギリスから塩を取り上げられていたと聞いた事があるが、味のないものは食べられない。今でも子供達に「マサカの時は水と塩よ」と言っている。皆うつろに、ただ黙々と国の目的についていた。今思うと、つくづく情けない時代であった。

八月六日午後、広島は大変だと聞こえてきた。星野はコレは大変な爆弾だろうと言っていた。大学に行っていなかったが、良く考える人で英語も映画を見ながら覚えたと言っていた。外で話す事ではなかったが、私ももう日本はダメだと思っていた。一生懸命ガマン、ガマンしました。

八月十五日、前々の日から噂が流れ、この先日本はどうなるのかと虚ろな心だった。昼前道を行く人が次々に、家のラジオはいつも吉野さんが直してくださったので良く聞こえるので、ラジオを聞かせてくれと入って来られ、狭い家が人で一杯になった。聞き取りにくくガーガーとしていたが、やはり終戦と聞き、今まで張りつめた気がガックリして、何だか気が抜けたようにポケッとなってしまった。何かしなくてはと、まず食をと、気を取り直して虚ろな気で出掛けた。

翌十六日朝、防空壕の上のカボチャをと見たら、無くなっていた。皆何も手につかぬ様にガックリしているのに、ナント、チャッカリ他人の作った物を取り、ドロボーして食べる人がいるとは、開いた口がふさがらぬ思いがした。

それから何日かするとアチコチにヤミ市ができ、今郵便局の所は広場で、お金を出せば何でも手に入るヤミ市だったが、それで皆飢えをしのいだ。とにかく戦争が終わった事は何よりも安心して、人それぞれ生活できる事になったが、私共はヤミもしないで真っ直ぐに生きたのでお米も買えず、主人は足が悪いので大変に生きた。